

## お母さんの口ぐせ

千葉隼大

「早く早く」がお母さんの口ぐせだ。朝起きる時も学校に行く時も「早く早く」。言われるたびに、ぼくは「今やろうと思っただのに」と心の中でつぶやいて、わざとのろのろする。お母さんは「早く早く！」ともっと大きな声で言う。けさも超せかされて、学童に行く時カギを忘れてしまった。お母さんに何度も電話したけど出ない。しかたないからおむかえを待っていたら、最後の一人になってしまった。お母さんは記者の仕事をしていて、いつも忙しいそうだ。家に帰っても、しかめつっつらで新聞やニュースを見てパソコンをパチパチたたいている。お父さんが死んじゃってから、「早く早く」は二倍か三倍にふえた気がする。

ぼくが楽しみにしていた夏休みの沖縄旅行でもお母さんは「早く早く」を連発していた。行きたかった「アプチャガマ」に入る時も「早く早く」。おおぜいの日本兵や住民の命をすくった糸数ごう。ガイドのとう山さんはお母さんより二十才くらい上の女性だったけれど、かい中電灯片手にまっ暗なごうの中をぐんぐん進んでいく。お母さんは、とう山さんを質問せめに行っている。ゆっくり聞きたいのに。はしよう風やのう症にかかったかん者がおくにねかされて、ごはんも水ももらえなかった話、ひめゆりの女学生がけん命にかんごした話、どれもすごかったけれど、ぼくが感動したのは日本兵の日比野さんの話だ。はしよう風にかかって死にかかっていた時、ぼく風でぐう然井戸のそばに吹きとばされた。そして、重しよの仲間達の「水をくれ」という声にこたえて水を運んでいるうちに元気になって命が助かったという。とう山さんが「人のためにがんばっていると、神様が長生きさせてくれるんですね」と話していた。ごうを出ると、さとうきび畑の横でお母さんがとう山さんに言った。「じゃあ、とう山さんもきつと長生きされますね。」とう山さんはちよつとはずかしそうに、でもうれしそうに笑った。お母さんも笑った。つられてぼくも笑った。

お母さんはもうすぐウクライナに取材に行く。本物の戦場だ。お母さんは毎ばん本を読んでくれている。昨日は「せんそうしない」という本だった。「こどもとこどもはせんそうしない けんかはするけれど せんそうしない」そうだよな。こどもは戦争しないのに、大人はどうしてするんだらう。お母さんはその答えを見つけに行くんだと言った。ぼくはすごく心配になって、お母さんの手にあごをのせた。お母さんはもう片方の手でぼくの頭をたくさんワシワシなでてくれた。あつたかかった。お母さんの作るおべん当みだいただ。もう少し大きくなったら、ぼくも答えを探しに行きたい。今度はぼくが「早く早く」つてせかすんだ。想ぞうしてニヤリと笑った。お母さんが「ニヤニヤしてないで早くねなさい！」っていつものしかめつっつらになった。でもそんなお母さんがぼくは大好きだ。てれくさいけど、いつかこっそり伝えようと思う。

## 評価のポイント

大好きなお母さんへの思いがストレートに表現され、読んだ人の心を穏やかにしてくれる素敵な作品です。満場一致で最優秀賞に決まりました。